

おやつのかん3 -ちょっとひとやすみ-

—並んで向き合う〔↑↑〕—

NO. 98



あんずの児童の支援では、帰りの会の前に“ラーメン体操”をしています。もう何年も続けている あんずの定番です。上手に踊る子もいれば、リズムを感じながらウロウロしている子、じっと見つめている子、みんなそれぞれの踊り方です。そして大人には、子ども達のよい見本となるべく、思い切り踊ってもらっています。子どもに踊らせるのではなく、大人が踊ってその臨場感に子どもを巻き込んでいきます。そんな場面での、ある日の出来事です。

その子は、いつも、みんなと同じようには踊りません。ウロウロしたり、輪の真ん中にいたり、自分流の過ごし方です。「やろうよ」と誘っても、笑顔でスルーしていきます。でも、その日は曲が始まると、私のところに走って来て、背中に抱きついてきました。顔を私の背中に押し付けて、両手を前に出してきたので手をつなぐと、「おや？」今日は振り払ってきません。なにかいつもと違う手応えだったので、私は手を緩め、少しずつその子からの手の握りに任せていきました。私はいつものように踊ります。その子は私の手を持っているので、自然と体操の振り付けと同じ動きでその子の手も動いていきます。「もしかしたら…」と、私が手の動きを鈍くすると、その子が私の手を動かし始めました。“二人羽織”のように踊りだしたのです。そして、体操が終わると同時にお母さんのところに走っていきました。走りながら、一度ちらっと振り返り、私を見た眼差しは、「踊ったね」と言っているように感じました。

嬉しくて、込み上げてくるものがありました。人懐こいくせに、人や場と上手に向き合うことが得意じゃない子なのですが、その子らしい向き合い方で、最後まで一緒に踊ることができたのです。ほんの数分間の出来事でしたが、とても感動した時間でした。

場面場面を切り取れば、できることも多く、その気になれば、身のまわりのこともひとりでこなせます。自由に遊ぶ中では、共感しながら、そこそこ言葉のキャッチボールもできるようになっているのですが、何せ、人や場に合わせられるストライクゾーンが広くない。そうすると、その子は大人を動かしがちになり、大人はその子を追いかけがちになります。大人の声かけや関わる手が、どうしても“止める手”“動かす言葉”になってしまいます。悩ましいところです。

大人との関係が〔→←〕こういう構図になると、思いが対立してしまうので、できるだけ〔↑↑〕こういう形で向き合いたい。同じものを一緒に見て聞いて、波長を合わせていきたい。「そろそろ行ってみようか?」「うん、そうだね」のタイミングを共感できる場面をたくさん作りたい。そう思う子が他にもいます。そして、人と関わっていくことに不器用さがある子とは、〔↑↑〕と向き合っていくことが、子どもをリスペクトしながら関わっていく大事なポイントだと思っています。

その子は、明日は踊らないかもしれません。きっとやらないでしょう。でも、一緒に踊った事実は消えません。次を期待しすぎると、無意識に圧をかけてしまうので、また一緒に踊れる日を信じて待ちたいと思います。そうしているほうが、次のチャンスは早いと思うのでね。

いつでも応えられるように準備しておこうと思います。

忘れないですよ。その子から握ってきてくれた手の感触。(R6. 7) K

